彩の国連携力育成プロジェクト（4大学連携教育事業）研修会

彩の国連携力育成プロジェクト・埼玉医科大学リーダー　柴﨑（しばさき）　智美（さとみ）（医学部准教授　地域医学・医療センター）

2015年11月15日、日高キャンパスの創立30周年記念講堂を会場に、彩の国住民の暮しを支える連携力の高い専門職育成プロジェクトの一環として、「保健医療福祉の人材に求められる力」をテーマに2部構成で研修会が開かれた。第1部は、一橋大学大学院社会学研究科の猪飼周平教授による「保健医療福祉の人材に求められる力」と題した特別講演会、第2部では、学生から教職員、現場の専門職まで交えた連携ワークショップを行った。

会場内の様子

地域の保健医療福祉担う人材育成に向けて

本プロジェクトは2012年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業として選定され、埼玉県内にある県立大、城西大、日本工業大、それに本学の4つの異なる専門職を育成する大学が、専門職連携教育(Interprofessional Education:IPE)の共同実施を通して地域住民の暮らしを支えることを目指す取り組みである。今回は本学が中心となり、保健医療福祉とは異なった社会学の視点から医療専門職育成研究に取り組んできた猪飼先生の特別講演会を企画した。

猪飼周平教授による講演

社会学者として医療史、医療政策を専門とする猪飼先生は、医療の歴史をひも解くことで今後の医療に関する予測が可能であることをまず説き起こした。次いで20世紀の医療は、様々な治療法の進歩により人々が病気を治してもらうことを目指してきたいわゆる治療医学という特徴を持っていたが、これからは治療医学だけではなく、「地域包括ケア」という生活モデル化を目指したシステムの中で、医療はどうあるべきかの議論が進行中だ。

医療現場から遠い社会学の役割　専門職の立ち位置を指し示す地図

現在、地域包括ケアが進められているのは、医療費を削減するためでも、患者が治らないためでもなく、ケアの質が良い、つまりQOLの向上につながるという理由からである。そういった時代においては、医師のみならず、看護師の果たす役割は重要であり、特に在宅という場面では、これまで以上に看護師・保健師が自律的に活動することが期待されている。さらに、患者のQOLを高めるためには、ソーシャルワークを実践できる力を社会福祉士のみならず、医師をはじめ多くの職種が持つ必要があることなどを強調した。

講演の冒頭、猪飼先生は自らの社会学者という立場を、現場からは遠いが、その現場の方々が、今どこに立っているのか、何を目指して行けばいいのかを指し示す地図を提供することができると述べられた。その上でここ数年、地域医療、地域福祉、老人介護の場で、頻用される地域包括ケアシステムという言葉自体、これを構築する意義や、構築するためのプロセス、構築することによって何が起こるのか、といった重大な問題についての答えを、推進している国でさえ持っていないのではないか、と疑問を呈した。

患者の自己決定権についても、今まさに亡くなろうとしている患者のリビングウィルが、その状態になる以前の過去の意思であり、まさにその時の患者意思であるのかは誰にも保証できず、私たち医療者があたかも患者の意思を尊重していると考えていること自体について、しっかり見直す必要があると問題提起した。

実りある講演内容　フロアからのアンケート結果も充実

1時間以上に及ぶ熱の入った講演の後、118人の参加者中、59人からアンケートへの回答が寄せられ、関心の深さが示された。表は、回答からピックアップしたものだ。参考にしていただきたい。

特別講演の企画に携わった一人として筆者は、大きく変化する社会において国民、専門職が患者中心の医療を提供するために、どのようなことを知っておくべきか、考えておくべきかを指し示していただけた密度の濃い貴重な時間であったと考えている。

第2部では、埼玉県立大学社会福祉こども学科准教授の新井利民先生の司会で、第1部特別講演での「求められる人材像」を“求めて”、「患者中心の医療におけるつながる力～今我々は何をすべきか～」をテーマに、4大学の教員と学生、本学3病院・光の家療育センター・毛呂病院、地域の医療・福祉・介護施設の専門職、それに東京医科大生も加わった混成チームを作り、IPW体験の実践を行った。

「患者中心の医療におけるつながる力とは」ワークショップ

最初に鶴ヶ島在宅医療診療所医師の齋木実先生から、現在起こっている連携の課題について「1%の科学と99%の思いやり」というテーマで話していただいた。引き続き1チーム6人の10チームに分かれ、専門的な視点と医療人として共通の視点に基づき、多様な意見を受け入れ、合意形成を目指す、つまり連携を阻む壁とそれを乗り越えるための対応をめぐりフリーディスカッションが交わされた。

チーム毎の発表の様子

熱い議論の中心となる学生

各自の意見の要点を付箋に写し、模造紙に貼り付けて問題点がひと目で分かるようにした。その上で、議論を通じてひとりひとりが得たこと、連携のための活動目標が立てられた。

参加者からは、学生を含め多様な背景の人たちと議論することで、日頃忘れていたような気づきがあり、専門にこだわるのではなく、職種や年齢の違いをすべて共有することは難しいものの、患者さんのためにという目標に向け実践していく連携が重要との意見が出された。筆者としては、様々な実践知を共有することができたと確信している。

特別講演会は学内の様々な部署の方々、彩の国連携力育成プロジェクトメンバーのご支援と協力を受けるとともに、毛呂山町の地域の皆様にも参加いただき、無事終了することができた。多くの関係の皆様に感謝申しあげたい。

アンケートの詳細（一部抜粋）

所　属	記載内容
保健医療福祉関係専門職	先生の講演内容を自らが行う仕事におきかえて考えると、とても有意義にとらえることが出来ました。
保健医療福祉関係専門職	自己決定権について、とても参考になった。
保健医療福祉関係専門職	現在、地域包括ケアシステムの構築が叫ばれている流れがよくわかった。医学が変化しているわけではなく、生活モデルへ変化したことで役割が変わってきていることや、今後“自己決定”を支えることがすごく難しい問題になってくることがわかった。
学　生	生活モデルについてよくわかった。自殺の例を用いて医学モデルと社会保障モデルと比較されたのがとても理解しやすかった。「living willは本当の自己決定ではない」ということがとても面白かった。今後の医療に必要な力が少しわかったような気がした。
学　生	社会という大きな視点から物を考える重要さを学んだ。色んな所で様々な考え方があることを知ることが、これから大切だと思った。時代によって異なる医師像があることを学んた。
学　生	遠い立場と言いながらも、現場の背景を取り入れた講演で大変有意義でした。世の中で推進していることなどに対しての批判的意見がわかりやすかった。
学　生	ソーシャルワークを担うのは、地域全体であり、患者に対して、医療職、看護職、介護職が手をとり合って、やっていくものだと再確認した。
保健医療福祉関係専門職	医療の変遷からひもとき、知らず知らずのうちに先入観をもっていることに気づかされた。改めて取組み直したいと思った。
介護者	治らないものは無理に治療することはなく、その後の生活をどう楽しむかを考えたい。
保健医療福祉関係専門職	看護師が自らの判断のみで（医師の指示なしに）働ける時代は来ないでしょう。何か確信があって言われているのでしょうか？ケアの事を言っているのであれば、すでに指示の必要ない職務ですのでケア以外の事を言っていると思う。
一般県民	医学界も大きく変化、広く成長してきていると感じた。今までの医学から他大学の先端教育を組み合わせ、地域ともつながることは大事と感じた。